

## 神野慧一郎講演会

- ・ 日時：2015年7月17日（金） 16:30～18:00
- ・ 場所：総合人間学部棟1102

タイトル：「近代的自然観」（『「自然」観念の歴史』より）

概要：今回の講義の目指している目標は、むしろ「近代自然学における自然把握」とでも言う方が、より正確かも知れない。しかし、近代における自然観の変容は、自然科学(物理学)のみならず、宗教、美学、社会思想にも大きな変革をもたらした。ここでは、それらの問題を取り上げないが、機会があればそれらのことにも触れてみたいと考えている。その伏線として上記の題を選んだのであるが、本日の話の内容は、近代自然学における自然理解の形成について述べるつもりである。

前世紀の中ごろまでの通説では、近代科学はニュートンが、コペルニクス、ケプラー、ガリレオの成果を総合、統一して、その体系を作り上げたことによって成立した、とされてきた。ところが前世紀の中ごろ、ジョン・ヘリヴェルの研究によって、ニュートンの『プリンピキア』の成立にデカルトの議論が大いに関わっていることが明らかになった。しかも、それはニュートンのその負債は、議論の枝葉末節に関する事柄ではなく、基本的な処に関わるものであるという指摘である。そうであるとする、近代的自然観について述べる場合、それを単にニュートンのものであると見ることは不備を含むであろう。もちろん、すでにヴァルタニアンのような歴史家は、18世紀における西欧の思想は、大局においてデカルトのものであった、と言っていた。それはどういうことであろうか。けれども他方、結局のところ、また特に天文学に関しては、勝利したのは明らかにニュートンであったと言わざるをえない。当然、ここには、かつての通説で言われてきたことだけでは説明できない複雑な事柄があったと考えられよう。それは、どういう事情であったのかについて述べることにしたい。